

長江中流域三角地帯の民間祭祀

三 村 泰 臣*・王 倩 予**

(平成19年10月31日受理)

Folk Rituals around the triangle region along the midstream of Chang Jiang River

Yasuomi MIMURA and Qianyu WANG

(Received Oct. 31, 2007)

Abstract

Up to now we have thought that 'Kagura' is a religious ritual that relates to the soothing of gods. But the author, through investigation of 'Kagura' performances in the Chugoku region and close observation of folk rituals along the Chang Jiang River in China, came to a different conclusion than any preceding studies. He concludes that 'Kagura' is actually a religious ritual which is not related to the soothing of gods, but in fact dead souls or evil spirits.

Key Words: Chang Jiang River, dead souls, folk ritual, Kagura performance, soothing of gods

はじめに

折口信夫の『古代研究』(昭和四年刊)以来、神楽は日本固有の文化とみなされてきた。本田安次は折口説をもとに、善神を対象にした「神座鎮魂説」で日本の民間神楽を統一的に解釈した。この解釈を踏まえた研究は現在も神楽研究の主流である。

筆者は日本の民間神楽(主として中国地方の民間神楽)を研究する中で、この折口や本田の学説に疑問を抱くようになった。日本の民間神楽は善神を対象にした神座鎮魂説では十分に説明できないこと、また日本固有の文化でなく東アジアの民間人との連携の繰りかえしの中で成立・展開したことを主張してきた¹⁾。

本研究では平成十六年秋から今日まで続けてきた長江中流域の民間祭祀の現地調査に基づいて、この神座鎮魂説を再検討し、日本の民間神楽研究の新しい方向性を提示してみたいと思う。主題とするのは長江中流域三角地帯に位置する西陽土家族苗族自治県后溪鎮の土家族の民間祭祀と、重慶市万盛区興隆鎮大場村の苗族の死霊祭祀である。

1. 土家族の民間祭祀

長江中流域三角地帯

長江中流域の四川省・貴州省・湖南省・湖北省・陝西省に囲まれ重慶市がある。面積八万二千三〇〇平方キロメートル、人口三千万人。日本の中国地方と九州地方を合わせた面積をもつ広大な行政市である。中国開発特別区に指定され開発の息吹が目覚ましい。

この重慶市と湖南省および貴州省に跨る山岳地帯(「長江中流域三角地帯」と仮称する)に西陽土家族苗族自治県がある。県都の西陽へは重慶市内から長江支流の烏江沿いを、バスでおよそ十時間も遡らなければならない。町を離れた谷々の集落では長江文明の担い手とされる土家族や苗族が昔ながらの暮らしを営んでいる。日本の古代祭祀や中世神楽を彷彿させるような神がかり・託宣の祭祀や神遊びなど、多種多様な民間祭祀が残る類まれな研究フィールドである。

県都西陽からバスで更に一時間ばかり山岳地帯に入った所に平和で穏やかな小さな町・后溪鎮がある。この后溪鎮

* 広島工業大学環境学部地域環境学科

** 西南大学文学院中文系



写真1 長江支流の西水が流れる長江中流域三角地帯（重慶市酉陽土家族苗族自治県后溪鎮）。

郊外の小江村に巫女による「神がかり・託宣」を残す古い民間祭祀が伝えられている(写真1)。長江中流域三角地帯の土家族の間に伝えられている巫女舞の一つで、古くは苗族の間でも実施されていたという。長江文明の精神世界につながる民間祭祀ではないかとも考えられる。

筆者はこの神がかり・託宣の巫女舞のうち、個人の依頼で行う「游冥」と、部落単位で行う「請七姑娘」を参観した。前者は神がかった少女が地界に赴いて託宣し、後者は天界に赴いて託宣した。いずれも民家の堂屋（神を祀る部屋）で行われた。

游冥

游冥は個人から特別な依頼があった場合に限り行う。一般の女性を神がからせて地界に赴かせ、あの世の模様を語らせる祭祀である。十八歳以下の未婚の女性（一般には村内で品行方正な十二～十三歳の少女）が選ばれる。堂屋の奥に簡単な壇を整えて神座とし、そこに箸一膳を挿した豚肉と銭・神酒を供え、また粿を盛った大椀を供える。この神座の前に顔を布で覆った少女を座らせ、周囲の者が歌で囃して神がからせ託宣を伺うのである。神がかった少女は集まった人々に歌舞によって地界のメッセージを託宣するのであった。

游冥は少女と司霊者（巫女があたる）の二人だけで進行

する。司霊者が少女の顔を布で覆い、手に三本の線香を握らせる。司霊者が歌で語りかけ紙銭を焼くと少女は線香を地に落とし、そして歌い始める。紙銭が焼かれ粿が祭場に投げられる中、少女は左手を静かに上げ、身体をピクピク震えさせながら神がかり状態に入る。そして地界の模様や死者の処置について歌で具体的に託宣をしていく。託宣が終わると司霊者は少女の背中を叩いて神がかりを解く。顔を覆った布を外すと神がかった少女はまったく普通の女性に戻るのである。

請七姑娘

請七姑娘は正月のトンド焼き行事の時節に行われている。部落の人々が七姑娘という女神²⁾(地元の話では山ノ神と関係があるらしいが不明の点が多い)の託宣を伺う民間祭祀である。堂屋の奥に游冥と同じような神座を据え、その前に布で顔を覆った少女を座らせる。神がかりに誘う方式も游冥とだいたい同じである。線香三本を手にした少女に、司霊者が口に含んだ酒を吹きつけると、少女は次第に荒い息使いをしながら両膝を激しくし震わせて神がかり、天界に赴いた。

周囲の者が歌って囃すうち、少女は両膝を両方の手で強く打ちながら歌で託宣する。拳を額に上げたり手を振ったりすることもある。神がかった少女に周囲の者が問いかけ



写真2 神がかり託宣する「游冥」と「請七姑娘」(后溪鎮小江村)。

ると、少女は身体を激しくゆすり荒々しい息づかいで天界の模様を歌で応答する。天界で何を見たか、誰に会ったか、自分は何歳まで生きるか、村に災難はあるか、誰が病気にかかるか、その時どのように対処すればよいか、等々を歌で託宣するのである(写真2)。

やがて少女は立ち上がって司霊者と組んで順逆の舞をする(逆を舞う方が多い)。少女が前になり司霊者は後について交互に歌を掛け合って託宣する。前方に舞い進み後方に退いて舞うこともある。少女は両手を上げて舞ったりもすることもある。舞と託宣が一段落すると、司霊者は祭場中央で紙銭を焼き、それで少女を清めてから背中を叩いて神がかりを解く。少女の顔を覆っていた布が外されると普通の少女に戻る。

巫女舞の誕生

ここに報告した後溪鎮小江村の神がかり・託宣の方式はいずれも同じである。選ばれた少女が神がかりして順逆に廻り、家庭や部落内の吉凶や病気、死者の有り様などを歌舞で人々に託宣する。

この民間祭祀は専門の巫女ではなく、村の中から選ばれた普通一般の女性(特に少女が重視された。少年も選ばれることもある)が巫女として行うことに特徴がある。専門の巫女が発生する以前に存在した巫女舞の原初形態を留めているように思われる。このような女性がやがて専門の巫女となり、家族や部落の種々の要請に応えるようになったのではないかと考えられる。土家族の間にはこうして誕生した専門巫女(「仙娘」または「師娘」という)や、夫婦セットの専門巫女(「神仙」という)がいて、死者の霊を呼び戻すなど各種の民間祭祀に関わっている³⁾。

西陽土家族苗族自治州后溪鎮周辺では、神がかった少女が吉凶や病気の原因、死霊の有り様などを託宣し、これらの対処方法も託宣しているのである。この少女の託宣に従って関係者たちは、病人祈禱や死者清めなど歌舞による



写真3 「打十保福」(花冠を着けた巫女が輪鈴で舞いながら神を迎える)。

具体的祭祀を執行している⁴⁾。その一つが病人祈禱の「打十保福」である。

打十保福

平成十九年三月二十五日に后溪鎮農業センター(かつて白氏一族の宗祠)で一人の病弱な子供の無事成長を祈願する打十保福が行われた。巫女の託宣を聞いた子供の親から依頼があったからである。主催者は午後から祭場の準備をし、夕食後より夜明けまでこの祭祀を執行した。

打十保福は巫女が行うのが一般的だが、筆者が参観したそれは当地の民間祭祀者・彭承善氏(八十一歳)を祭主とし、巫女役の男性祭員三名と太鼓、鉦の樂人二名の計六名で行われた。病気を及ぼす悪霊を人形に乗り移らせて浄化する興味深い祭祀であった⁵⁾。

宗祠内に一メートル高の台を作りその上に壇を設置。この壇に竹で門を組み立て「拏雷頭應」と記した門札を付け、そこより両側の竹柱に長い赤布を垂らしていた。台の前に紙垂(各五本と二本)を下げ、トウモロコシ、箸一膳を立てた豚肉(「ダウトウ」という)を供え、燈明と三本の線香を灯す。主要な準備品は一尺大の人形(顔を白紙で蔽い目鼻や口などが墨で描いてある)と鶏一羽である。他に赤布や祭主が着ける花冠や腰に付ける神衣(「裙」という)など準備する。打十保福の祭式は、神迎え、悪払いと祭場・祭員の清め、人形による悪霊攘却の三段形式で行われた。

○神迎え 第一段は巫女と祭主が鈴を打ち鳴らし順逆に舞いながら神を迎える。まず紙銭を燃やし線香の煙を酒に注ぐ。鉦(「鏡」という)を打つと祭主は祭場の外に出て叫び声をあげ神を呼び、祭場に戻って令旗を打ち諸悪を退ける。その後すぐ花冠を着けた巫女が鈴(円形の輪鈴)を手に採って壇前で小さな舞をする(写真3)。巫女は額に赤布を巻き後頭部に紙垂(「披髮錢」という)を結わえて垂らしていた。日本の神社巫女を髣髴させた。

祭主が巫女の頭部両脇に紙銭を挿すと、巫女は神衣の裙



写真4 「打十保福」(小児程の大きさの藁人形に酒を注いで悪霊を鎮める巫女)。

手に採り奏楽に合わせ一舞しそれを腰に着ける。それから奏楽と神歌に合わせ順逆の舞を続ける(逆の舞が多い)。巫女舞と相俟って祭主は壇前に跪き水牛の角を叩き、また令旗を打って紙銭に神酒を注ぎ歌で巫女に舞を促す。巫女はしばらく舞ってから線香を採りそれをトウモロコシに挿してから鈴を打ち鳴らして再び順逆の舞を続ける。

巫女の舞が一段落すると、祭主は準備していた鶏を祭場に引き出し壇前のトウモロコシを食べさせる。それから祭場に橋を掛け渡し、その周囲で八字を描いて舞う(魂を招くために舞うらしい)。それから歌で祈願し、鶏をその橋に載せ周囲で鈴を打ち鳴らしながら順逆に廻る。続いて祭主は壇前に控えていた巫女の背中を打って神返しをし、鶏を祭場の隅に下げる⁶⁾。神返しされた巫女は鈴を打ち鳴らして一舞し、神衣を脱いでそれを鈴と一緒に高台に置いて第一段を終える。

○清め 第二段の清めは祭主が水牛の角を叩くことから始まる。巫女は鈴を手に採り壇前で左右往復に舞い、神酒を頂いて逆回りに舞い、赤布を手に奉じそれを壇前に置く。続いて鈴を採って左右往復の舞をする。この巫女舞は足を引きずりながら舞う滑稽な仕草の舞で、人々を笑いに誘う。祭主から吉凶の託宣を尋ねられると巫女はそれに応え、線香を手に採りそれで呪文を描いて鈴を祭主に渡す。祭主は壇前で舞い令旗を打つ。それから花冠を着け赤布で頭部を締め、紙銭を頭部両脇に付け後頭部に披髪銭を下げ、両手に紙銭を採って歌いながら逆回りに舞う(鈴も逆に採る)。

次に神衣を採って一舞しその神衣を身体に着ける。紙銭を焼き、鈴を打ちながら舞い続けた後、壇前に跪いて拝礼する。紙銭に神酒を注ぎそれで額を拭う(清められる意味があるらしい)。それから神酒を口に含みそれを火に吹きつけて炎を出す⁷⁾。この動作を数度繰り返して悪を払い、祭



写真5 「打十保福」(祭場の外へ運び出した藁人形を燃やし悪霊を攘却する)。

場や祭員を清めるのである。最後に祭主は壇前に跪いて拝礼し、紙銭を燃やしてから逆を一舞して終える。

○悪霊攘却 最後の第三段は小児程の大きさの人形を壇前に引き出し、この人形を使って悪霊の鎮送を行った。祭主が花冠を採って舞った後、第二番手の巫女が同じように滑稽な舞をする。すぐに祭主は花冠を着け、披髪銭を後頭部に結んで下げ、腰に赤布を巻いて巫女の出で立ちとなる。腰にも披髪銭を着ける。祭主は手に神衣を採って一舞しそれを腰に着ける。

それから祭主は水牛の角を採り、跪いてそれを打ってから高台上り壇を挟んで巫女たちと対座する。祭主は令旗を打ちながら巫女たちと問答を繰り返す。続いて祭主はゴア(卦)を投じて籤占いをする。巫女はその籤に従って神酒を飲みそれを人形に注ぐ(写真4)。三名の巫女たちは同じように籤占いに従い神酒を飲んでそれを人形に注いでいく(この間に笑の場面もある)。

酒を注ぐことが一段落すると、祭主は高台から降り、神衣を脱ぎ頭と腰に着けた披髪銭を外し、それを祭場の外方向に向いて燃やす。それから鈴を打ちながら人形を清める動作を繰り返す。歌を歌い神酒を注いで人形を清めるのである。それから鶏の嘴を人形の顔に隈なく突き当て顔を血で赤く染める。即座に人形の腕をつかみそれを背負って祭場の外へ出る。そしてその人形を地面に座らせ火を点け素早く燃やす(写真5)。こうして病人を患わせていた悪霊を追放するのである⁸⁾。

打繞棺

巫女の託宣に従って行われるもう一つの事例が打繞棺である。道教の影響が見られるものの、長江中流域三角地帯の死者の遊びの模様をよく伝えている⁹⁾。「繞」は回るという意味であり、打繞棺は遺族が棺桶の回りを廻って歌舞し



写真6 「打繞棺」(棺桶の周りで順逆の歌舞を繰り返して死者を清める)。

死者を清める遊びなのである。遺族たちは頭から長い白木綿布を被って垂らし、長い場合は七日七夜にわたりこの死者清めの遊びをするという。

死者の出た家は巫女の託宣に従って堂屋の中央に棺桶を据え、それを囲んで打繞棺を行う。堂屋の外に幡を下げ、入口には紙垂を下げる。堂屋内に下界は龍、中界は馬、上界には鳥を描いた三界の軸を掛ける。その奥に壇を作り、壇と中央の棺桶の間に白木綿布を下げる。長椅子の上に据えた棺桶の上に蠟燭や線香の他に十個の燈明と幡を並べる。また棺桶の後にも燈明を点す。死者を送るための祭祀でないので、天蓋を下げたりはしない。祭主の他に五～六名(人数の決まりはない)の巫女たちが、太鼓(中太鼓)、大小の鉦(鏡)、噴唎(ラッパに類似した楽器)、ホラ貝などの楽器を鳴らし棺桶の周りを歌舞しながら死者を清めるのである(写真6)。

紙銭を焼きホラ貝が鳴ると、打楽器が連打され噴唎が鳴り渡る。すると紺色の祭服をまとった祭主(頭に四角の帽子を被る)が歌と詞で祈禱を始める。しばらくの祈禱があって歌舞に移る。巫女たちはそれぞれ楽器を手にし、大鏡を持つ祭主を先頭に棺の周りで楽をかなでながら縦一列になって順逆に廻る。やがて巫女たちの列は八字を描いて棺の周りでもつれ合うように激しく廻っては廻り返す¹⁰⁾。後退しながら廻ることもある。順に廻る時は急調子、逆を廻る時は緩調子である。全体として逆に廻ることが多い(逆に廻りつつ順逆を繰り返す)。

この打繞棺の歌舞は棺桶の周りで止めどなく続けられる。歌舞を奏しながら遺族も加わって棺桶の周りを順逆に廻り、紙花を投げ散らしながら舞い続けるのである(これを「散花」という)¹¹⁾。またその間に種々の祈禱があり物語りもある。終わり近くなると遺族たちを笑いに誘う物語が始まる¹²⁾。そして全員の笑によってこの打繞棺の幕は閉じられるのである。



写真7 頭に白い木綿布を被り慟哭する身内の女性たち。

2. 苗族の死霊祭祀

除霊

土家族が伝える「打繞棺」に類似した民間祭祀が苗族の集落に伝えられている。「除霊」といわれる死霊祭祀である。死者ではなく死者の霊(死霊)をあの世界から迎えてそれを清め、再びあの世に送る死霊供養の神遊びである。亡者の霊を焼いて送るので「焼霊」ともいわれている。筆者は二〇〇六年三月十二日から十六日まで重慶市万盛区興隆鎮大場村に滞在し、馬氏一族八十三名によって行われたこの除霊を参観した。

除霊は葬儀が終了した十三日目から行ってよいとされるが、一般には死後二～三年を経た吉日に数日間かけて行われる。土家族の「道場」のように仏教や道教の影響を受けておらず、長江中流域で最もプリミティブな死霊祭祀に属するのではないかと思う¹³⁾。

万盛区興隆鎮大場村の除霊は二十九歳で病死した男性(馬氏)の霊を供養するため、死後二年を経て行われた。亡者の一族が「孝帕」という白い木綿布を頭に被り、それを腰のあたりまで下げた装いでこの除霊に参加した。身内の女性たちは交替で亡者の側に付き添い、慟哭し亡者を慰め続けた(写真7)。また祭員たちは蘆笙という竹と瓢箪でできた鈍い音を響かす笛を終日終夜にわたって吹き続け、順逆の歌舞を繰り返して亡者を慰めるのであった(写真8)。

除霊の祭場

除霊は故人の堂屋を祭場にして行うのを慣例とする。しかし馬氏の家屋は土作りの伝統的苗族建築の家屋であったため傷みがひどく、故人の兄の家を祭場にした。しかしこの家も手狭であったので、変死者の除霊を行う場合のように庭に仮屋を建築して行われた(写真9)¹⁴⁾。

この仮小屋は二間四方の掘っ立て柱の小屋で、屋根と壁



写真8 蘆笙を吹きながら竹柱の周りを順逆に廻り、亡者を慰める掌壇師。



写真10 苗族が最重要視する太鼓。死霊祭祀「除霊」のときだけに使用する。



写真9 変死者を清めるために建築される仮屋（正式には茅で建築する）。



写真11 簸簸と呼ばれる「霊屋」。蛇を象徴する二重ねの鏡餅が入れられてある。

は茅で囲む習慣がある（今回はビニールシートで囲っていた）。正面に入り口があり、正面奥に長さ一丈（約三メートル）、幅一尺（約三十センチメートル）の白木綿布（「孝彩」または「財」といい、亡者の妻の兄が贈る）を張り渡し、祭場の中央に松柱または竹柱（今回は竹柱）を立て、そこに太鼓を吊るす。そしてこの柱と白布の間に亡者の霊が宿る霊屋を据える。

柱に吊り下げる太鼓は苗族の魂を表象する最重要の道具と見なされている。樟の大木を削りぬいて作った頑丈な作りの太鼓である（棺も樟を削りぬき船形に作るらしく、樟への信仰が認められる）。この太鼓の両面には前回の除霊で犠牲に捧げた牛の毛がついた皮が張ってあった（写真10）。太鼓の中には鈴二個が入っている（祖霊や雷神が入っているともいわれる）。族長はこの太鼓に供物を供え大切に保管し、葬祭と除霊のときにだけこの太鼓を使用する。普段は打つ事も触れることも禁じられ、直に地面に置いてはいけない。

太鼓とともに重要な装置が先述した亡者の霊の宿る霊屋

である。「簸簸」といわれる（ボボとはザルのこと）。この霊屋は径一メートル大の竹製のザルを台にして作った簡単なもので、前方が開いたドームに似た形をしている。霊屋の屋根は黒布で覆い（女性の場合は白布）、開いているドームの先端に白布を丸めて巻きつける（帽子を示すという）。その上に二十センチメートル四方の柄物の布五～六枚を載せる（枕を表すという）。

この霊屋は亡者の霊が宿るところであるが、亡者そのものとも考えられている。この霊屋に鏡餅二重を入れ（「糍杷」という）、その上に灯明を置き除霊の間中それを点しておく。鏡餅は蛇体、灯明は蛇体の目を表すと伝えられており、霊屋は亡者そのものであると同時に蛇体とも考えられている（写真11）。この霊屋の中に酒盃（九個）と占いに使う小竹を割って作った簡単なゴア（卦）一対が置いてあった。

除霊の祭式

馬氏の除霊は三月十五日から十六日まで丸二日間かけて



写真12 霊屋にいる亡者に蘆笙を吹いて語りかけ慰める掌壇師。



写真13 太鼓を先頭に田んぼの招魂幡へ移動する遺族たち。

行われた。上記のように柱、太鼓、霊屋などを整え、仮小屋と田んぼの二ヶ所を祭場にして行われた。この除霊の祭式は次の(A)~(G)の順番で行われた。

(A)太鼓を祭場に迎える。(B)白布を引き延べ霊屋を据え柱を立てそれに太鼓を取り付ける。(C)亡者の魂を霊屋に迎える。(D)太鼓と蘆笙による歌舞で亡者を慰める(写真12)。(E)鳥と幡の周りで歌舞し亡者を慰めてから牛を犠牲にする。(F)孤魂を鎮送し亡者の魂を送る。(G)成就の祝い。

仮屋内での行事は「表1」のA~Dから把握できるので、仮屋外の田んぼで行われた行事(E~G)について簡単に説明を加えておく。

死霊送り

仮屋の行事が終わると一同は太鼓を先頭に行列を組み、白布を張り渡した田んぼの祭場へ降りる(写真13)。田んぼ

の中央には枝のついた柱松が立ち、その枝に太鼓が吊るしてある。柱松には竹で作った鳥と長銭(御幣のこと)のついた「招魂幡」(將軍幡ともいう)という竹竿が立てかけてある。縁者たちと舞手たちが蘆笙を吹きながらこの柱松(招魂幡)の周りを順逆に三周、合計九回廻る(写真14)。

朝食を済ませてから亡者との別れが始まる。祭主は祭文を詠み、舞手は蘆笙を吹いて霊屋の亡者を慰める。これを繰り返した後、牛を犠牲にする(これを「牛を打つ」という)。関係者たちは田んぼの祭場に残り、そこで亡者と共に食事をいただく。女たちは霊屋から離れないで泣き続ける。

亡霊を送るための「焼霊」の儀式は太陽が沈む前に行われる。祭主は霊屋の前で卦を使って占いをし、籤が降りるたび供え物の酒を大地に注いで亡者を清める。また飯を霊屋の前方(焼霊する紙銭が積み上げられている方角)に撒

表1 「除霊」の祭式(重慶市万盛区興隆鎮大場村)

一日目(3月15日)

A	4:30~5:30	祭員が族長の家の太鼓を下ろし、背篋(苗族の使う背負子)に入れて祭場の仮屋まで運ぶ。
B	5:30~6:10	仮屋中央に柱松を立てそれに太鼓を吊るす。白布(孝彩・財)を正面に張り渡す。孝彩と柱松の間に霊屋を据える。準備が整うと関係者は仮屋内で会食し祭儀の役割を確認する。
C	6:10~7:00	丸めたチガヤ(茅)で太鼓を打つ(太鼓の霊を呼び求めるのだという)。蘆笙を吹いて一舞し、霊屋を仮屋の入り口に移し供え物(酒・飯)をする。卦で亡霊が来るかどうか占う。籤が下りるとその都度九個の酒盃に酒を注ぎ亡者へ供する。訪れた亡者の魂を霊屋に鎮座させ、蘆笙を吹き仮屋内に導き安置させる。
D	7:30~翌朝	亡者に食事を供し、大鼓を打ち、蘆笙を吹いて(祭文に相当する)亡者と語り合う。祭主は柱を順逆順に合計九度廻り(女性の場合は七度廻る)、兎歩の舞を繰り返し亡者を慰める。この間、縁者たちは線香を上げ亡者と語る。孝帕を着けた泣女が側で慟哭し亡者を慰める。

二日目(3月16日)

E	7:30~11:30	一同は行列を組んで仮小屋から白布を張った田んぼの祭場へ移動する。太鼓を先頭に祭場中央の柱松の周りを全員が九度廻る。柱松には枝がつき、竹の鳥と長銭(御幣)のついた「招魂幡」(將軍幡ともいう竹竿)が立てかけてある。祭主が亡者を慰める祭文を唱える。蘆笙で亡者を慰めてから犠牲の牛を斧で打ち屠る。関係者は田んぼに残って亡者と食事する。泣女も留まる。
F	14:30~15:30	祭主は繰り返し卦で占い酒を大地に注ぐ(亡者に供する)。飯を霊屋の前方に投じる(孤魂に供する)。亡者を蘆笙で慰め終わると、孝彩・霊屋・柱松・大鼓を一気に倒す。すぐに供え物を紙銭の山(二山ある)で焼き尽くす。女たちは慟哭する。
G	15:20~16:00	関係者(子供も含む)が仮屋内で盃事をする。その後大小九個の竹盃に酒を入れ、肉を入れた碗を煙で清め、盃と碗を一同が競って奪い合い楽しむ。



写真14 招魂幡の周りを順逆に三周、合計九回歌舞して亡者を慰める（撮影・王倩予）。

いて孤魂に供する。舞手は蘆笙を吹いて祭場を順逆順に廻り、霊屋に近づいて蘆笙を吹き終わる。

すると祭主は霊屋を一気に崩しにかかる。柱松も倒し大鼓も下ろす。霊屋の中の供物を紙銭の山（二山ある）で燃やす（写真15）。霊屋にした簸簸は大地に伏せその上に蘆笙を置く（中には銭と飯が入っている。銭は会場を務めた家の者がいただく）。山が燃えるとき女たちは嗚咽する。祭場に張り渡した白布は煙にかざし亡者の妻がそれをいただいた。この白布は切って年下の者に配るといふ。白布をもらった者は亡者の子孫になるといわれる。

すべての儀式が終了すると、関係だけ（関係者の子供も含む）が仮屋に籠り杯を交わす。その後で酒（九個の大小の竹の盃）と肉（九個の茶碗に入れる）を奪い合う珍しい遊びが行われた¹⁵⁾。

3. 東アジアから見た日本の民間神楽

長江中流域三角地帯における民間祭祀

西陽土家族苗族自治州県后溪鎮の土家族の民間祭祀と重慶市万盛区興隆鎮の苗族の死霊祭祀を紹介したが、長江中流域三角地帯にはこの他にも様々な民間祭祀がある。当地には少なくとも二種類の民間祭祀が観察される。少女による神がかり・託宣と、専業巫女による種々の祈禱の神遊びである。

前者を〈タイプA〉、後者を〈タイプB〉とすれば、〈タイプA〉に土家族の「游冥」や「請七姑娘」があり、〈タイプB〉に同じ土家族の病人祈禱「打十保福」と死者清め「打繞棺」、また苗族の死霊祭祀「除霊」がある。これらを日本の古代祭祀の範疇に従って区分すると、〈タイプA〉は「巫女舞」に、〈タイプB〉は「神遊び」に相当するといえよう。

この二種類の民間祭祀の中で、〈タイプB〉が〈タイプA〉に依存して行われている。当地の民間祭祀の成立過程には〈タイプA〉→〈タイプB〉の図式が認められる。また〈タイプA〉と〈タイプB〉は別々に独立した民間祭祀として



写真15 「焼霊」（亡者は霊屋の供物と一緒に燃やし尽され無事あの世へ旅立っていく）。

行われている¹⁶⁾。日本の古代祭祀の範疇で考えれば、「巫女舞」と「神遊び」は全く異なる主旨であり、「巫女舞」から「神遊び」が発生したと考えられる。

長江中流域三角地帯の民間祭祀の特徴

これまでに紹介した長江中流域三角地帯の民間祭祀を、〈タイプA〉〈タイプB〉に類型化してまとめると表の通りである（表2）。

表2 長江中流域三角地帯の民間祭祀

民間祭祀	〈タイプA〉	〈タイプB〉		
	巫女舞	神遊び		
巫女	少女(降神巫)	巫女(世襲巫)		
内容	神の意志を伺う	託宣に従って行う祈禱		
神	善神	悪神		
祭祀	神がかり・託宣	病人祈禱	死者供養	死霊祭祀
事例	游冥, 請七姑娘	打十保福	打繞棺	除霊(道場)
芸態	歌	順逆の歌舞	順逆の歌舞	順逆の歌舞
主要装置	神座	人形	棺桶	霊屋/柱/白布/仮屋

また長江中流域三角地帯の民間祭祀の特徴として以下の五つを挙げる事ができ

- (1) 長江中流域三角地帯には〈タイプA〉と〈タイプB〉の異なる二形態の民間祭祀がある。前者は一般の少女による「巫女舞」で、後者は専業巫女による「神遊び」である¹⁷⁾。
- (2) 〈タイプA〉は神の意志を伺うことを目的とし、〈タイプB〉は〈タイプA〉の託宣に基づいて種々の祈禱を行う。〈タイプA〉→〈タイプB〉の構造があり、その逆は成り立たない。
- (3) 〈タイプA〉は善神を対象とし、〈タイプB〉は悪神を対象とする。そのため〈タイプA〉では善神を招く神座が整えられるが、〈タイプB〉では悪神を祓う装置（人形、棺桶、霊屋、白布、仮屋など）が使われる。また蛇との関わりを暗示する装置も使われる。

(4) <タイプA>は託宣が目的であるため歌が主となるが(舞は従である)、<タイプB>は悪霊鎮送を目的にするため歌舞が中心となる。その歌舞では太鼓が使われ、悪霊を清めるために順逆の舞(その変形態である八字の歌舞)が行われる¹⁸⁾。

(5) 長江中流域三角地帯で最も重要視されている民間祭祀は「死霊祭祀」である。

神座の前の神遊び

日本の民間神楽研究の方向付けとなった学説が折口信夫の「鎮魂説」である。本田安次はこの鎮魂説を受けて、神楽祭祀に不可欠な要素が「神座」を立てること(神座説)¹⁹⁾と、「鎮魂」の式であること(鎮魂説)であると考えた。そして神楽祭祀を「神座の前で行はれる祈禱の式」、あるいは「神座の前の神遊び」と定義した²⁰⁾。

ここで神座に迎えらるる神はあくまで善神と理解されているので、折口や本田の日本の民間神楽への眼差しは善神に向けられていたことになる。この善神中心の民間神楽研究は今日まで堅持されてきた²¹⁾。

日本の民間神楽の本質は本田によれば、善神を依りつかせその魂を分与することで人々の魂を再生させる「神座の前の神遊び」とされる。本田は日本の民間神楽を<タイプA>として捉えていたようである。このように捉えた日本の民間神楽には次の三つの特徴が備わっていると信じられた。

- (1) 日本の民間神楽は日本の固有文化である。
- (2) 日本の民間神楽は善神を対象にする祭儀である。
- (3) 日本の民間神楽は<タイプA>を基本とする。

長江中流域から見た日本の民間神楽

中国長江中流域三角地帯で行われている民間祭祀から、日本の民間神楽の特徴を見るとどうなるであろうか。上記(1)~(3)について簡単な指摘をしておきたいと思う。

(1) 日本の民間神楽は日本の固有文化である。

長江中流域の民間祭祀では順逆の歌舞を行うことは何度も指摘してきたが、日本でも順逆の歌舞が民間神楽の基本である。このことは、長江中流域と日本の民間神楽の間に共有される何かがあると考えられる²²⁾。他にも長江中流域では日本の民間神楽と同じような祭場・祭式・祭具・祭文が使われており、両者の類似性が認められる。長江中流域と日本の民間祭祀にこうした類似性があることから、日本の民間神楽が日本固有の文化であると断言することはむずかしい。

(2) 日本の民間神楽は善神を対象にする。

日本の民間神楽は善神を対象にした祭祀と考えられている。しかし長江中流域の民間祭祀には善神を対象にする

<タイプA>よりも、悪神を対象にする<タイプB>が多く行われている。病人祈禱、死者清め、死霊供養など種々の災厄を祓う民間祭祀が主流である。その際順逆の歌舞を演じて悪神を清めている。ところが日本では、善神を対象にする<タイプA>を神楽祭祀と考えこれを「神遊び」と呼んでいる。長江中流域では「神遊び」は<タイプB>に当たる。

長江中流域では善神よりも、悪神を清める民間祭祀が多く行われている。また中国地方では悪霊や死霊に関わる民間神楽が多く存在しており、日本の民間神楽が善神を対象にしていると考えるのは不十分である。

(3) 日本の民間神楽は<タイプA>を基本とする。

長江中流域の民間祭祀ではまず神がかり・託宣の巫女舞があり、次にその神がかり・託宣にしたがって種々の民間祭祀が執り行われている(<タイプA>→<タイプB>)。善神を対象にする<タイプA>だけでなく、悪神を対象とする<タイプB>があり、両者は全く違う目的で実施されている。日本の民間神楽は<タイプA>が展開したと考えられているが、むしろ<タイプB>の神遊びを基本にする祭祀と考えるのが正しいのではなかろうか。

おわりに

以上指摘したように、日本の民間神楽は東アジアの広がりの中で再考察することがこれからは必要ではないかと思う。日本の民間神楽を日本固有の文化とみなして研究を推し進めるなら、私たちは重大な誤りを犯すことになるだろう。

本研究は2006年度財団法人JFE21世紀財団アジア歴史研究助成(研究課題名:「長江流域と環瀬戸内海海域における民間神楽祭祀の実証的比較研究」)による研究成果の一部を紹介したものである。関係各位にこの場を借りて厚く御礼を申し上げたい。

註

- 1) 三村泰臣、王倩予「長江流域の死霊祭祀—重慶市西陽土家族苗族自治州小河鎮桃坂村の「大道場」—」民族藝術, Vol 22, 2006, 100~107., 三村泰臣「日中民間祭祀祭場的比較研究」山西長治賽社与樂戸文化国際学術検討会論文集, 上冊, 2006, 203~212., 三村泰臣「神楽の建築」民族藝術, Vol 23, 2007, 114~120., 三村泰臣「神楽による死霊の供養—西日本と南中国の事例から—」宗教研究, 80巻, 2007, 435~436.
- 2) 土家族の神話に七人の女神の話がある。
- 3) 夫婦がセットで行う神がかりは貴州省と重慶市の間に今も存在している。西陽土家族苗族自治州小河鎮小崗村はその一例である。日本では近世初頭まで、男の法

- 者と女の神子がセットで死霊祭祀など種々の民間祭祀を行った。
- 4) これら諸民間祭祀(清めの歌舞)を日本書紀に記されている天若日子の歌舞になぞらえ「神遊び」と呼んで一括する。
 - 5) 広島県尾道市瀬戸田町名荷にある名荷神楽の三方荒神御繩も同じような人形を使い悪霊鎮送の神楽祭祀を行っている。三村泰臣「名荷神楽の研究」民俗芸能研究, 39号, 2005, 1~25.
 - 6) 「游冥」「請七姑娘」の神返しと同じである。
 - 7) 本来はここで山ノ神を迎えるため裸になり焼いた鉄で悪を払っていた。また煤を顔に塗って悪を払っていた。子どもたちに墨を塗ると子供の健康と成長とがもたらされると信じられていた。
 - 8) これと類似する人形を使う行事が長江中流域三角地帯で変死霊を清める「翻紅案」でも行われている。
 - 9) 平成十九年三月二十三日, 参観。師匠の系統を辿ると道教に近いが, 道教儀礼ではなく完全な民間祭祀として行われている。湖南省西部でも行われている。
 - 10) 八字を描く舞は蛇の舞といわれている。それはちょうど藁蛇を八字に廻らせる大元神楽の綱貫を連想させる。また阿刀神楽の八ツ花の舞や, 行波神舞の荒霊武鎮の舞手が交差する舞を思い浮かばせる。
 - 11) この散花は三作神楽の花鎮めの舞に相当するのではなからうか。
 - 12) たとえば女は醜い女もいるが美しい女もいるなどといった内容の物語。天細女命の舞で周囲の神々が笑ったという『古事記』の記録と関連があるかも知れない。
 - 13) 三村泰臣, 註1, 参照。
 - 14) 変死者の徐霊は屋外に切妻型の仮屋を建築して行う習慣がある。
 - 15) 法事が無事終了したことを祖先に報告するために行うといわれている(祖先の話を聞くのだともいう。その際, 老人のようにしわがれた声で苗族の第一の祖先の話しがあるという)。本来は夫婦の部屋とするのだとも, 竈の近くとするのだともいわれている。比婆荒神神楽で行われる「へっつい遊び」に似た遊びである。
 - 16) 今日の長江中流域三角地帯の民間祭祀は, 「巫女舞」と「神遊び」の二種類が複雑に融合し, 様式化・芸能化して多種多様な民間祭祀を形式している。同じ傾向は日中韓でも認められる。
 - 17) 神がかり・託宣を行う少女は降神巫として, 神遊びを行う巫女は世襲巫としてその役割を果たしている。
 - 18) 八字の舞は蛇の動作を象徴しているといわれる。死者を蛇(祖神)へと近づけるためにおこなわれたのであろう。日本の民間神楽で八字を舞う形態が残っているが, 清めと供養から出ているかも知れない。
 - 19) 本田はこの神楽神座説に基づいて日本の民間神楽の分類を試みている。神座が剣や弓などである場合を「出雲流神楽」(採り物神楽), 獅子頭の場合は「獅子神楽」, 湯立の釜であれば「伊勢流神楽」(湯立神楽), 舞手そのもの場合は「巫女神楽」とした。
 - 20) 「祈禱の式」について天細女が神がかりした記述を検討し, 神楽祭祀の本義が善神を我が身に依りつかせ(神がかり), その魂を人々の体内に祝い込めて生命を再生させる(鎮魂)ことにあると解釈した。この神がかりと鎮魂のわざが『古事記』に「あそび(楽)」と記されていることから, 祈禱の式を「神遊び」とも呼んだ。
 - 21) たとえば民俗芸能学者の三隅治雄は, 平安時代に宮中で行なわれていた「内侍所御神楽」を分析し, それが善神の「神迎え」(神招ぎ), 「神遊び」(神人交歓), 「神送り」の三部構成の神事芸能であったと分析している。善神の「神迎え」が特別視されたのが古代の神楽祭祀であるとし, ここに神楽祭祀の起源を求めている。また『西日本諸神楽の研究』の著者である石塚尊俊は, 民間神楽の原型を神体出現の舞としているが, この神体も善神を対象にしている。
 - 22) 后溪鎮の「打十保福」は人形を使って悪霊を鎮送する祭祀であるが, これと同一の民間神楽が広島県尾道市瀬戸田町名荷の「三宝荒神御繩」で行われている。